

特集「進化する総合B」にあたって

青木 康

はじめに

この特集は「進化する総合B」と名づけられている。総合Bとは、全学共通カリキュラム(以下、全カリと略記)の総合教育科目を構成する4つの科目群のひとつで、正式には総合B群とよばれているものである。序論としての「特集にあたって」について、特集の本編をなすのは、この総合B群の科目を実際に担当してきた何人かの教員の教育実践の報告と、それをふまえた総合Bの「進化」にむけての提言をつづったエッセーである。特集の最後には、資料として、1997年4月の全カリ実施以来2001年度までの「総合B開講テーマ一覧」をおさめた。

2001年度に開講される総合Bの科目数は池袋と武蔵野新座の両キャンパスをあわせて23で、豊かな科目展開を誇る全カリ科目全体から見れば、必ずしも大きな部分をしめているとはいえない。それでは、その「少数派」である総合Bについて、なぜこのような特集がわざわざ企画されたのか、また、それがいかにして可能になったのか。こうした点について、特集を企画した側

からあらかじめ簡単に説明をしておくことで、総合B群科目を担当した方々による報告や提言の文章をより理解しやすいものにするというのが、この「特集にあたって」の目的である。

1 総合Bの特質

総合Bは、立教大学に限らず日本の大半の大学で一般的におこなわれてきた授業の方式、1学期間あるいは1年間にわたって教員がある科目の授業をひとりで運営していくという方式をとらないことを、その出発点としている。もちろん、この伝統的な方式は当面、立教大学を含めて日本の大学の授業において主要な形でありつづけるであろう。しかし、それがもつ問題点も明らかになってきており、少なくともカリキュラムの一部について、異なる方式の授業を展開する試みは、全カリ実施のはるか以前からさまざまにおこなわれてきた。

そうした試みのひとつとしてよく知られているのが、いわゆるリレー講義で、毎回(あるいは2、3回ごとに)異なる担当者が登場して講義を次々に受け継いでいくものである。この方式

は多くの大学で採用されており、確かにテーマによっては魅力的なものになりうるであろう。しかし、立教大学の全カリは、より踏み込んだ、教える側の人間が教室につねに複数存在するという授業改善案を提示した。それが総合Bという方式である。この方式は、3でも述べるように人的資源を多く必要とすることもあり、その特質についての理解が全学で広く共有されていなければ、順調に運営していくことができない。

総合B群科目では、複数の教員が授業に参画するが、その科目にかかわるいっさいについて最終的に責任をおう、コーディネーターとよばれる専任教員がひとり決められている。このコーディネーターは、他の専任あるいは非常勤の科目担当者と協力して授業を進行させていくが、少なくともコーディネーターはすべての回の授業に出席し、科目としての一貫性を保つ。それ以外の専任あるいは非常勤の科目担当者については、コーディネーターと同じくすべての回の授業に出ている者もいれば、少数の特定回の授業のみに参加する者（後者のような担当者を、内部的には「スポット」とよんでいる）もある。そして、この点が重要であるが、各回の授業にはコーディネーター以外の科目担当者も少なくとも1名は参加することになっている。

この原則によって、総合Bを履修している学生は、同じ教室に複数の教員がつねに存在するという環境で学ぶこ

とができる。学生は授業担当者からの講義を聴くが、その講義は、通常の授業方式によるのとは異なり、教室内でただひとりの学問的権威者が発した言葉として絶対化されることがない。総合Bの教室では、同席している他の教員が、学生の前でその講義について質問をしたりコメントをしたりする、さらには教員どうしで熱っぽい議論を始めてしまうことすらあるからである。それらを通じて、総合Bの学生は、講義で語られることが唯一の真実ではないということに気づき、自らも知的探求の場に足を踏み入れることを促されるのである。

2 総合Bの魅力

複数の教員が学生の目の前にいるという総合B群科目の外見上の特徴は、どのような内容の授業にふさわしいのだろうか。たとえば、総合Bでは、大学の通常の科目ではカバーしきれないような特殊な領域の専門家に非常勤講師として講義をしてもらい、さらに、その場ですぐにコーディネーターをまじえた質疑応答の時間をもつといったこともできるので、ひとりの担当者による講義とは比較にならない深さと広がりをもった授業を展開することが可能になる。また、方法的に異なる学問を学んできた専任教員どうしで、大きな問題について議論をじっくりとたたかわせるといっても大いに魅力的である。もちろん、この両者を組みあわせたような工夫をすることもできる。いずれ

においても、履修する学生の所属学部・学科や学年を限定しない全カリ総合教育科目の利点をいかして、学生からも多様な意見が授業の場に出される形になるのが理想であろう。

このように総合Bは、多様な要素が会いぶつかりあうところに魅力があるが、それをサポートする制度が大学として工夫されている点がきわめて重要である。このサポートがあることで、総合Bの魅力が夢とか可能性ではなく現実のものとなり、コーディネーターの授業への積極的な取組みにもつながっている。たとえば、ある学期に総合B群科目を1つ開くために、非常勤講師を3人分まで使えるという制度は、その代表的なもののひとつである。1人の非常勤講師には、総合Bの運営で忙しくなるコーディネーターが普段担当している専門科目を代わりに講義してもらい、残る2人の非常勤講師に総合Bの授業に加わってもらおうといったことができるようになっていく。また、さきほど「スポット」という表現を紹介したが、学期を通じて1人の非常勤講師を委嘱するのではなく、その枠を使って、4人のスポットの講師にそれぞれ3週ずつの授業参加を依頼するといったこともできる。いずれも4年前に総合Bが始まったときに導入された制度で、こうした制度面での支援が、総合Bのこれまでの成功に大きく貢献していると考えられる。

もちろん、いたずらに総合Bを優遇する特例的な制度をつくってあげばよ

いということではない。総合Bのさらなる進化・発展をはかるには、今回の特集を含めていろいろな人からアイデアを出してもらい、制度面での工夫の努力をつづけていく必要がある。

3 総合Bの難しさ

総合Bは魅力的である一方、他の通常の科目にはない難しい点を多くもっている。以下の本特集のエッセイにもうかがわれるように、とりわけてコーディネーターの負担が大きい。

総合Bのコーディネーターは、3人から十数人にのぼる科目担当者チームのリーダー役を務める。授業を何曜日の何時限目におくかということから始めて、日々の授業の進め方、最後の成績評価にいたるまで、コーディネーターの責任で、しかし、できるだけ科目担当者の意見もくみながら決定していかなければならないことは多い。総合Bの魅力になっている異質な要素のぶつかりあいは、限られた授業時間内で学生にその意味やおもしろさを分かせようとすれば、一定の「演出」も必要となる。他の科目担当者の協力も重要とはいえ、総合Bの成功はコーディネーターの努力におう部分が大きくならざるをえない。2で若干の例を紹介した制度面の支援も、もちろん十分でない面がある。そうした事情もあって、総合B群科目の担当、とくにコーディネーターを引き受けることは、多くの教員にとってかなりの負担と感じられているというのが正直なところで

ある。

さらに、総合Bの授業内容自体、確かに知的におもしろいものであるにせよ、自分の専門の知識だけではこなしきれない部分がふくまれているとすれば、負担であるということもできる。専門外のことをしなければならぬから負担であるという論点は、全カリの総合A群科目についてもしばしば指摘される場所であるが、総合Bでは、他分野の教員との「対決」を迫られるような場面も予想されるだけに、負担感がいっそう大きい。正直な言い方をすれば、総合Bは、このように人的資源をぜいたくに、一面では無理をして使っているからこそ、魅力的なのである。それゆえ、総合Bは一般に学生の評判もよく、充実をはかりたいと思う一方、実際に展開できる数はおのずと限られてしまう。2001年度の23という開講科目数は、立教大学の現状ではほとんど上限に近いと考えられる。ただし、それは現状を前提としての数字であり、将来の進化した総合Bの展開可能性は未知の領域に属している。

4 総合Bの進化の意味

総合Bはその誕生以来、すでに変化、いや進化しつつある。初年度であった1997年度に開講された総合Bの科目数は7、多くの科目が前後期とも開講されたので、展開された授業の数では12であった。翌98年に武蔵野新座キャンパスに新学部ができたこともあったが、何よりも多くの教員と学生の支持をう

けて、2001年度の総合Bは約2倍の23の授業が開かれるまでに成長した。世代交代も着実に進み、初年度開講科目で残っている科目も少なくなった。

当初、全カリ運営センターでは、コーディネーターを引き受ける教員が少なく科目が展開できなくなる事態が生ずるのではないかと心配もしていた。しかし、幸いにしてこの予想は大きくはずれ、各学部や全カリの各教育研究室からは、毎年多くの企画が提案される。また、近年は、学内のいろいろな研究所や事務局にも提案をしてもらう制度を導入して、すでに具体的な成果もあげている。

このように、全カリの総合Bは、今後解決していかなければならない難しい問題をかかえながらも、着実な進化をとげ、成功のうちに最初の4年間をおえたと考えられる。そのような今、なぜ、何のために、この「進化する総合B」という特集が組まれたのであろうか。

理由のひとつは、誕生から4年をへた総合Bの定期点検である。総合Bでは、既存の科目については考えられなかったような大胆な試みがいくつもおこなわれている。したがって、当初の成功に安心することなく、大小さまざまな問題点を丁寧に確認し、それをひとつひとつ解決していく不断の努力が当然に求められよう。

しかし、実は総合Bの問題はもっと広い視角からも考えられるべきである。総合Bの現状を検討するなかで発見さ

れた難問、それを解決するために総合Bがなしとげた進化についての情報は、狭く総合Bの世界だけにとじこめておくべきではない。全カリのその他の科目群や、さらには各学部の専門教育科目の充実・発展にもつなげていくという視点から、それらを見直すことが重要である。

確かに、現在の総合Bには、限られた数の特別重点科目が実験的に展開されているといったおもむきがないとは言えない。しかし、そこで用いられた制度や内容上の工夫で、有効性が確認できたものについては、他種類の科目にも拡大していったよいはずである。筆者は以前、何人かの総合Bコーディネーター

経験者にインタビューする機会をもった。その際、多くの方が総合Bのコーディネーターの役は疲れたともらす一方で、充実感があり、一休みしたら、またやってみてもよいと感じていると回答されたことに一種の感動をおぼえた。担当者をひきつけて離さないこの総合Bの魅力は何なのか。それをさぐりあて、総合B以外の科目群においても再現できたとき、総合Bのみならず立教大学全体が大きな進化をとげることになるであろう。

(あおき やすし 本学文学部教授、
全カリ運営センター特別教務委員)